

# たまのよこやま



自然の恵みを

召し上がれ

# 縄文食体験

縄文の村お薦めメニューから、今日は特別に縄文ランチをご賞味いただきます。メニューに沿って、この秋実施された縄文食体験をご案内いたします。

## アンケートの回答から (ベスト5)

- ・ 普段食べることができない鹿肉やクッキーが予想以上においしく、もっと食べたかったです。
- ・ 今までやったことがない、食べたことがないことをいろいろと体験できた。
- ・ 鹿肉を黒曜石で切るとき楽しかった。鹿肉がおいしかった。
- ・ いろいろなドングリを粉にするのが楽しかった。クルミがやわらかくておいしかった。
- ・ 縄文時代の食生活がよくわかった。火起こしも楽しかった。

### menu

- ーオードブルー  
黄金色の秋
- ースープ  
鹿肉ベースのきのこサトイモのトロトロ汁
- ーメインディッシュー  
マテバシイの石焼縄文クッキー  
山芋ときのこのホイール包み焼き  
蝦夷鹿肉のミニステーキ
- ーデザートー  
ドングリムックの黒蜜添え
- ードリンクー  
ヤマブドウのフレッシュジュース

火おこしでついた火が点火される。

まずはオードブルから。イタリア風に生ハムとメロンといきたいところだが、ここは縄文風に生ドングリで決める。クルミ、マテバシイ、スタジイの殻を石で割り、そのまま中身を食べる。意外にもクルミを生で食



縄文クッキー焼き上がり

縄文食体験は火入れ式から始まる。今も昔も調理の基本は火。IH



点火

クッキングヒーターなどで調理ができるわけではない。参加者ははじめに、縄文の森から燃料になる焚き木を集め、そこに

べられることに対して半信半疑の参加者が多い。そして食べた第一声が「あっ、おいしいジャン」。素材を生かすには、まずは生の味を知らなければなら



縄文鍋をグツグツ

ない。

続いて縄文食の定番メニュー、縄文クッキー作り。ドングリのアク抜きをパスするため、今回はアクのないマテバシイを全面的に使用。参加者全員ですりつぶしたマテバシイと



みんなでドングリ潰し

スタジイとクルミそしてクリの粉末に、ウズラのタマゴとヤマイモでつなぎ、少々ハチミツで甘みを出して一気に混ぜ合わせる。後はペタペタと一口サイズの大きさにそろえて、よく熱せられた石板の上でじっくりと焼いて、縄文クッキーの完成。焼きたての熱々をほおぼる。味は、・・・秋空の下で食べれば何でもおいしい。

8ℓ入る大形の縄文土器では、40人分のキノコ汁を仕込む。縄文時代キノコの土製品も出土しているが、毒キノコに当たった縄文人もいたはず。今回は江戸前のシジミと昆布でだしをとり、シメジにナメコにエノキダケ、秋ならではのキノコを山盛り入れる。鍋は火加減が肝心。スイッチで調整ができない焚火では、薪のくべ方で微妙な火加減を調整しながらグツグツ煮込むこと30分。縄文鍋の完成。木枯らし一番が吹く中で、冷えた体を芯から温めてくれる最高の一杯。よそっていたスタッフの口には一口も入ることもなく、あっという間に大鍋が空になる。ウーーン。

縄文人の定番ステーキは鹿肉か猪肉。そこでこの秋のスペシャルメニューとして、鹿肉のミニステーキを用意。北海道でエゾジカが獲れたという情報を聞きつけ、早速空輸してもらおう。雌の小鹿の右足一本丸ごと。さすがにワイルドである。前日までに血抜きをして小分けにしたブロックを、縄文人よろしく黒曜石のナイフで細かく切り裂いていく。これがまたこの黒曜石、縄文人もびっくりするほどよく切れる。参加者全員で感心しながらスパスパと黒曜石を動かす。細かくスライスされた



一本丸ごと



鹿肉シュツ、シュツ

鹿肉は熱々の石板の上でジュウ。血のしたたるようなレアでいただきたいところだが、ここはじっくりと焼いたウエルダム



ジュウ

で。焼きあがる端から参加者の口へ。あわててスタッフも口にする。言うことなしに最高。アンケートでの一番人気もやっぱり鹿肉でした。今回の太もも一本分は、この秋に4回開催した縄文食体験への参加者約130人の口に入ったこととなる。

最後はデザート。韓国でおやつとして食べられているドングリムック。ドングリの粉をお湯でといたものをそのまま冷やして固めたコンニャクゼリーのようなもの。味はないので黒蜜をたっぷりつけて・・・・・・。口直しにやまぶどうジュースを飲んで完食。

食べた後には片づけを。参加者全員で後片付けをして今回の縄文食体験は無事終了。十分縄文食を堪能していただけたでしょうか。また来秋のお越しをお待ちしております。ちなみに、これまでのところお腹をこわしたという連絡はまだ入っていません。

今回メインディッシュに加えた縄文クッキーは、全国32の縄文遺跡から200点以上出土している「クッキー状炭化物」と呼ばれているものを見本としている。実はこれまでその内容物そのものについての分析例はほとんどなく、かつ分析も困難であるとされてきたが、近年新たに開発されてきた炭素・窒素安定同位体分析という自然科学分析法によって、その主成分がドングリ系のデンプンである、という分析結果がこの秋の学会で報告された。これで、また一歩縄文人に近づけたような気がする。(小薬)



完成

# 古代多磨の鉄を考える

—公開セミナー「よみがえる古代東国の鉄文化」に寄せて—

東京都・神奈川県・埼玉県の埋蔵文化財調査機関が連携して開催する公開セミナーが、来年1月16日に平塚市教育会館で行われます。

このセミナーは、各財団で実施しています発掘調査の成果を、広く一般の方々にも知ってもらうことで、遺跡や遺物、ひいては考古学への関心を持っていただくことを第一の目的としています。

今回のテーマは古代の「鉄」作りに関するものです。一般に“鉄”についてのイメージは、おそらく冷たくて硬いものを連想されると思います。ところが、数ある金属の中で、鉄ほど私たちの生活や文化と密接に関わる身近な金属はありませんし、これが無くなれば、途端に社会そのものが成り立たなくなってしまいます。古代社会においては、なおさらのこと鉄の重要性が高かったに違いありません。

セミナーでは、近年、その実態が明らかになりつつある古代相模国府に関連する鍛冶遺跡や、奈良時代以降盛んに鉄作りを営む埼玉県大山遺跡の新たな調査成果などを紹介しながら、「古代東国の鉄文化」の実像に迫ろうとする試みなのです。

東京では、府中市武蔵国府関連遺跡や多摩地域に展開する古代村落の鍛冶関連の遺跡を取り上げ、多摩ニュータウン遺跡群における鉄器生産に関わる調査成果と比較検討することで、古代多磨郡内での鉄器の生産や流通を明らかにしたいと考えています。そこで、本誌上を借りまして、当日セミナーで発表する調査成果の概要をご紹介します。

\*\*\*\*\*

皆さんご存知かと思いますが、古代において武蔵国の役所は府中市に置かれました。近年の発掘調査によって、大国魂神社周辺が国府の中核である国庁にあたることを確認され、武蔵国衙跡と呼ばれています。

国衙の周辺地域では、7世紀～11世紀の<sup>たてあな</sup>堅穴建物跡<sup>のあと</sup>や<sup>ほったて</sup>掘立柱建物跡<sup>のあと</sup>が数多く検出されています。

現在までに、堅穴建物跡で3000棟、掘立柱建物跡で1000棟近くが確認されています。いわばマチ

の様相を呈する国府関連遺跡ですが、ここには、労役のために来た人やモノを納めるために来た人、また多様な手工業に従事する人なども大勢住んでいたことでしょう。国府周辺から検出された<sup>かじこうぼう</sup>鍛冶工房と呼ばれる鉄や鉄器を加工して製品を作るための堅穴建物の中には、一辺が10mを超えるような長大なものもあります。多くの工房の床面には炉が複数あって、鉄を加熱し加工するための施設と推定されます。複数の工人が同時に操業できることから、ある程度は分業体制が確立していたと思われます。

国府周辺の古代村落でも、鉄作りに関わる工房が見つかります。例えば、日野市落川・一の宮遺跡では二つのカマドと複数の炉をもつ一辺8.5mの鍛冶工房跡が、八王子市時田遺跡では、カマドと鍛冶炉を有する一辺7mの工房跡が検出されました。落川・一の宮遺跡は、多摩川沖積地に展開する大規模な集



写真1 多摩ニュータウンNo.390遺跡の製鉄関連遺構



写真2 馬具(鐙)が見つかったNo.248遺跡の鍛冶工房跡

落跡で、平安時代後期に最盛期を迎え、初期武士団の根拠地としても注目されます。この遺跡からは、武器としての鉄鏃や刀装具、馬具類などが多く出土しています。時田遺跡の工房跡は壁の周囲に柱穴が並ぶ特異な構造を示し、焼印なども出土しています。私はこれらの工房を営んだ人々は、特殊な鍛冶技術をもつ工人と考えています。もしかしたら、国衙付属の工房からやってきたのかもしれませんが。

一方、多摩丘陵に展開する多摩ニュータウン遺跡からは、古代の鉄作りに関わる遺跡が43基見つっています。No.390遺跡(写真1)からは、10世紀中葉の製鉄関連炉の痕跡が見つかり、大型の羽口や炉壁が多く検出されました。都内において唯一の例です。鉄器を製作した鍛冶遺構の多くが竪穴建物ですが、No.248遺跡(写真2)やNo.5遺跡のようにカマドを持たず、壁柱穴をもつ特徴的な工房跡もあり、10世紀以降に出現します。

多摩ニュータウン遺跡では、鍛冶遺構は10世紀以降増えはじめ、10世紀末～11世紀にかけピークを迎えます。これに対し、国府関連遺跡では10世紀半ば以降建物の減少に伴い鍛冶遺構も激減することから、きわめて対照的なあり方を示します。

また、出土鉄器の数量を農具、工具、武器・馬具類の種別で集計・比較しますと、9世紀末～10世紀以降農具に対する武器(写真3)の出土割合が増す傾向があります。

こうした現象は落川・一の宮遺跡とも共通するも



写真3 多摩ニュータウン遺跡から出土した鉄鏃と馬具

ので、村落の武装化が想定されます。おそらく、国府の解体と同時に、国衙工場の鍛冶技術が周辺地域に拡散した可能性が高く、在地豪族はそうした技術を取り込むことで、丘陵開発や土地経営を支える生産基盤としたのではないかと考えています。(松崎)

入場無料

東京・神奈川・埼玉埋蔵文化財関係財団普及連携事業 公開セミナー

## よみがえる古代東国の鉄文化

—相模・武蔵の発掘調査成果から—

2010年1月16日(土) 10:00~16:40(受付9:30~)

平塚市教育会館 3F大会議室

第一部 10:10~

10:25~11:00

11:00~11:35

11:35~13:00

13:00~14:05

14:05~14:40

14:40~15:15

第二部 15:20~16:35

趣旨説明

報告 1: 相模国府域の鉄生産の様相 明石 新・栗山 雄揮 (平塚市博物館)

報告 2: 相模・南武蔵の鉄生産 齊藤 真一 (かながわ考古学財団)

昼休み

特別講演: 古代都城と集落の鉄 松村 恵司先生 (文化庁)

報告 3: 北武蔵の鉄生産—大山遺跡の事例を中心に 赤熊 浩一 (埼玉埋蔵文化財調査事業団)

報告 4: 南武蔵多磨郡における鉄器の生産と流通 松崎 元樹 (東京都埋蔵文化財センター)

ミニシンポジウム よみがえる古代東国の鉄文化

申し込み方法: 往復はがきかメールにて、行事名、住所、電話番号、氏名、ふりがなを明記の上、下記、野庭出土品整理室へ  
メ切 2010年1月12日必着

申し込み・問い合わせ先: 財団法人 かながわ考古学財団 野庭出土品整理室 〒234-0056 神奈川県横浜市港南区野庭町1660

TEL 045-842-9888 fax 045-842-9904 (平日 8:30 ~ 17:15) E-mail: fukyu@kaf.or.jp http://www.kaf.or.jp

## 石器の「ツボ」 Vol.5

### 石斧（その1）

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第5回。毎回ひとつずつ石器を紹介していきます。今回は石斧です。

石斧は「いしおの」とも呼ばれ、旧石器時代と縄文時代の両方で出土します。ただ、弥生時代でも出土しますし、日本だけでなく世界中で見ることができます。そして、その数は大変多く、日本で最も多く出土した石器のひとつと言えます。

石斧は、石のかけらを打ち欠いて作り、細長く扁平な形に仕上げます。横から見ると、先端が少し尖っていることも特徴の一つです。また、重さを利用して使うので、少し重量があります（石槍などと比べてですが…）。

さて、写真左が旧石器時代の石斧、写真右が縄文時代の石斧です。どちらも、現在私が調査している府中市武蔵国分寺跡関連遺跡から出土したものです。

旧石器時代の石斧は、楕円形をしたものが多いです。左側は石を打ち欠いた後に刃先などを研磨して、丸い刃を作り出しています。それを「磨製石斧」といいます。右側は、石斧を製作している最中に折れてしまった「未成品」ですので少し形が不恰好ですが、完成したとしたり楕円形をなしたと考えられます。こちらは打ち欠いただけで、「打製石斧」といいます。

どちらも、約3万5千年前のもので、日本の旧石器時代の最初の頃のもので、石斧は、旧石器時代

の最初期に多いのですが、後半には少なくなります。

縄文時代の石斧には、いろいろな形をしたものがあります。左側は、石を打ち欠いた後に刃先などを研磨して、丸い刃を作り出した「磨製石斧」です。旧石器時代の「磨製石斧」と似ています。真ん中と右側は、石を打ち欠いただけの「打製石斧」です。打製石斧には、「短冊形」、「撥形」、「分銅形」があるとされています。それぞれ、短冊、撥、分銅に形が似ているから、そう呼びます。真ん中・右側は、「短冊形」と「撥形」の中間と言ったらいでしょうか。これらは、縄文時代中期、約5千年前のものです。縄文時代は最初から最後までどの時期にも、多少の差はあっても石斧が使われています。

### 石斧の使いみち

ところで、石斧はすべてが「斧」に使われていたわけではありません。

旧石器時代の石斧は、木を伐る斧であると考えられています。ただ、動物の肉をさばく包丁に使われたという説もあります。

一方で、縄文時代の石斧は、磨製石斧こそ木を伐る斧と言われていますが、打製石斧は違います。土を掘るためのスコップであると考えられています。どのように使ったかは次号で紹介します。（つづく）

石斧の「ツボ」：石斧は、旧石器時代にも縄文時代にも使われました。特に縄文時代には、たくさん出土します。（伊藤）



旧石器時代の石斧（写真は実物の1/3）



縄文時代の石斧（写真は実物の1/3）

# 古墳時代住居跡の貯蔵穴

## —「中田遺跡展」の開催によせて—

八王子市に所在する中田遺跡は、昭和41から42年にかけて発掘調査が行われ、弥生時代から平安時代の竪穴住居跡が多数発見されました。特に、集落全体が発掘された遺跡がほとんどなかった当時においては、古墳時代後期の大規模な集落の発見は、考古学史上画期的な成果として全国的に注目を集めました。

それから40年の星霜を経た平成19年、再び中田遺跡の調査が当センターによって実施されました。これにより遺跡全体の住居跡検出数が合計179軒となったほか、F地区とした今回の調査地区が遺跡西端にあたることから、古墳時代から古代の集落が当初の予想よりも西側まで広がっていたことも証明されました。さらに、縄文時代中期の集落も検出され、中田遺跡の新たな顔も明らかになっています。今回は、この中から、住居の張り出し部に貯蔵穴を持つ古墳時代後期の住居跡についてご紹介します。

古墳時代後期の竪穴住居跡を調査すると、煮炊きなどをしたカマドや柱の穴、貯蔵用と思われる穴（貯蔵穴）などが検出されます。地面に穴を掘ってものを貯蔵する方法は縄文時代からありましたが、古墳時代後期には住居内に設置することが盛行しました。中田遺跡でも様々なタイプの貯蔵穴が調査されましたが、カマドの反対側の壁に張り出し部を設けて、ここに貯蔵穴を作った例は、通常カマドの側に設けられることが多い中で、ひときわ目立つ存在です。今回の調査でも、2軒の竪穴住居跡に、この張り出し部に設けられた貯蔵穴が認められました。この2軒は、一辺が8～9m（現在の2DK～2LDK程度の団地の広さ）と、ともに中田遺跡の古墳時代住居跡の中でも大型の住居と言えます。

貯蔵穴は、カマドの反対側の南壁中央に120～130cmの張り出し部を設け、床面から10～20cm下の所で平坦な面を巡らせ、そこからさらに深さ60cmほどの方形の穴が掘られたものです。貯蔵穴内に堆積していた土層には故意に埋め戻した痕跡はなく、住居が廃絶するまで口が開いた状態で使われていたものと思われます。内部および周囲からは、他の貯蔵穴同様、多くの土器や石製品などが出土しました。さらに、住居跡内の張り出し部手前には、研究者の間で「出入口ピット」と呼ばれている、壁側に向かって高くなるように斜めに掘られた小さな穴も見つかっています。こうした状況から、住居の入口施設の下に貯蔵穴が造られていたと考えられ、場合によってはその上面には穴を塞ぐ蓋があったことも想像されます。

こうした特徴をもった竪穴住居跡は、関東地方を中心に中部地方や東北地方にも分布しますが、一遺跡で19軒も調査された中田遺跡は、出色の検出数と言えます。このような構造のもつ意味は、①出入口を威厳的な意味で張り出させ、その下の空間を利用して貯蔵穴を造った特別な形態とする説や、②祭祀の中心的役割を担った竪穴住居との説などが唱えられていますが、まだ結論は見出されていません。しかし、こうした様々な疑問や仮説は、逆に私達の想像力を大いにかき立ててくれます。

遺跡は昭和45年に八王子市の史跡に指定され、中野町団地内に一部が「中田遺跡公園」として整備され、竪穴住居1軒などが復元されています。  
(鶴間)



古墳時代後期の住居跡(6号住居) 奥にカマド、手前に張り出し部とその内部に掘られた貯蔵穴、その少し上に出入口ピットが見える

## 「中田遺跡展」

—大規模調査のさきがけ—

期 間：2月6日～3月22日

場 所：八王子市郷土資料館

詳細は同資料館 042-622-8939 へ

# シリーズ 多摩の縄文 アらかると — 流通編 —

昨日、宅配便で青森からりんごが届いた。便利な世の中になったもので、家に居ながらにして青森から採りたてで新鮮なりんごが届く。

もちろん縄文時代に宅配便はないが、それでもこの多摩の地に、はるばる遠方から運ばれてきたものが数多く出土している。その代表格はなんとと言っても黒曜石。黒曜石は縄文人が好んで利用した必要アイテムで、矢じりやナイフとして大いに利用されている。ただし、残念なことに近所の多摩川では入手できない。この地域での代表的な原産地は、多摩から200 km以上離れた、ビーナスラインが走る長野県の霧ヶ峰や和田峠の山間と、150 km離れた伊豆七島の神津島の南西沖にある別名アシカ島と呼ばれている恩馳島のニヶ所が黒曜石の二大産地であった。これを今仮に信州ブランドと神津島ブランドと呼んでおきたい。

両ブランドはどうやって多摩まで運ばれてきたのだろうか。地図上に遺跡を落としていくとはっきりと見えてくる。まず信州ブランドは、諏訪から甲府盆地を下ってさらに小仏峠を越えて多摩に入る、ほぼ今の中央高速道沿いのルート、甲州街道で運ばれてくる。このルートを使って黒曜石とともに早期の押型文土器や中期の曾利式土器と呼ばれている信州系の土器も一緒に運ばれてきている。

一方、神津島ブランドは太平洋の島なので当然丸木舟を使うほかないが、すでに2万年前の旧石器時代から多摩に神津島ブランドが運ばれていることが確認されている。当時は氷河期で海面が100 m以上低く、神津島、式根島、利島が陸続きの一つの大きな島となっていた。そのため現在よりも比較的楽に神津島にたどり着いていたようであるが、そのルートは神津島が離島になった縄文時代にまでしっかりと引き継がれていった。ただし、本州から渡った縄文人が黒曜石を採った帰りに、神津島温泉に浸かったかどうかは定かではない。



No.72遺跡の大珠

神津島の黒曜石は、一旦伊豆半島東海岸の河津町付近に陸揚げされ、海岸沿いに北上し熱海、平塚を経由して相模川を昇って多摩に運ばれてきたものと推定できる。さしずめ東海道と鎌倉街道ルートといったところか。このルートに乗って、関西系の前期北白川下層式土器や静岡、愛知の東海系の土器もどンドン多摩に入ってきている。土器の中には一体何が運ばれて来たのだろうか。

土器以外では、真鶴半島の先端に産する、小松石こまついしと呼ばれる安山岩製の石棒や石皿も、海岸で製作されたものがこのルートを通って多摩まで運ばれてきている。

甲州街道、東海道、鎌倉街道と記してきた。当然東北道、常磐道もある。福島産の大木式土器たけぎ、茨城、千葉産の浮島式土器うきしまや阿玉台式土器あたまだいが運ばれてきている。つまり、当たり前なことではあるが国境などないということ、no borderな時代であったこと。多摩の縄文人はただ単に山奥で孤立していたわけではなく、地産地消を基本としながらも、さらにそれを支える広域なネットワークを果敢に形成し、伝統的な流通ルートや組織を確立していった。そしてそれは、少なくとも2万年もの間育まれてきたもので、昨日今日出来上がったものでは決してない。それがまさに縄文時代であったともいえる。

最後にヒスイにも触れておかなければいけない。先日、地質の世界遺産とも言われている世界ジオパークに指定された新潟県糸魚川市にヒスイを産する姫川・小滝川と青海川がある。ここのヒスイが350 km離れた多摩にまで運ばれてきている。限りなく透明に透き通る緑色は縄文人をも魅了させてしまった色なのだろう。大珠たいしゅ（たいしゅ）と呼ばれ一種の威信財として大きなムラからのみ発見されるが、信州ブランドの延長ルートで、いくつかのムラを経由しながら、徐々に多摩まで運ばれてきたものと思われる。

それにしても、青森りんごのお返しを東京バナナにしようかキティーちゃんグッズにしようか真剣に迷っている。  
(小葉)

「たまのよこやま」の由来 万葉集卷二十 之 四四一七の 防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女) を由来としています。



たまのよこやま 79

2009年12月25日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>